

老婦人との巡りあい

友成： 「お二人の元の素性を打ち明けて、
その名を名乗っていただけないか。」

老人夫婦：「今は何も隠すことはない。」

「我らは高砂と住吉の松の精。」

「それが、仮に夫婦の姿となって現れたのだ。」

- 世阿弥作「高砂」より

2001年5月14日

大阪、さつきが丘にて

やっと、西歐的な静けさのある場所を見つけた。それほど完璧とはいかないまでも、人々の温かみのある話し声や新聞をめくる音などが聞こえる。コロンビア・コーヒー、私の膝より高いテーブル、フランスのクロワサン、人工的な庭園をのぞむ窓。たたみとお辞儀から解放された場所が私には必要だった。数ヵ月の後、この地で、体重も減り、幾つかの習慣もなくなった。大したことではないと言われるかもしれないが、その習慣とは挨拶や頬にキスをする、そんなことである。

私の左側では、二人のおじさんが新聞を壁のように立てかけて読んでいる。私にとっては神秘であり、これからもそうあり続けるであろう多くの小さな記号を解釈するために眉間にしわを寄せている。右側にいるおばあちゃんは、80代のレディで自分の自転車のかごに入れてもってきた小さな植木鉢に話しかけている。私は、多少礼儀正しく、また慣れているかの如く（ウエイトレスのように）驚かないふりをする。日本の高齢者は人口ピラミッドで土台となる年齢層で、カフェ、レストラン、庭園などを頻繁に訪れる。そして独り言をいいながら、状況によっては親切な言葉を発することもあれば、嫌悪感を表すように声の調子が変わることもある。

二人用のテーブルがある。一つの椅子には小さな植物が置かれ、もう一つの椅子におばあちゃんが座っている。おばあちゃんは、アメリカン・コーヒーとコップ一杯の水を植物用に「氷なしでお願いします」と言って注文する。そのあと、おばあちゃんの眼差しはちょっと私に向けられる。私は、英語版の書物「高砂」で顔を隠す。日本語で誰とも話したくないという合図である。私は、人が何について話しているかは理解できるが、話し言葉に身を置くより、丸く大きな目を持つ猫のように傍観者となる方が好きである。

松とは決して尽きることのない言葉を指す (住吉)

「もうじき花が咲くよ」とおばあちゃんは言う。「嬉しくないの？」 植物は答えない。多分、おばあちゃんが乾いた土にコップ一杯の水を注いだからだろう。植物は満足気にみえる。また、おばあちゃんの輝きのない目は、また私の目をみつめる。私は本を読み、また読みふける。自分自身を読むように仕向ける。私の頭もそれに従う。おばあちゃんは立ち上がり、私に言う。「すいません。洗面所に行く間、これらのものを見ておいていただけませんか？」まるで母の友達か親しい人に話すような打ち解けた親しみのある日本語である。また、私が一人の外国人であること、言われていることを殆ど解さないような全くの外国人であることに気がつかないでいる（こうした振る舞いは日本人の間でごく普通のことである）。「いいですよ」と答える。戻ってくるや、植木鉢にさらに水を注ぎ、葉にそっと触れ、少しコーヒーをすすり、紙ナプキンで茎をふいた。

松の枝は輝き
常緑なり
葉は歌を詠ずるもととなり
優美さに心を寄せる露の珠なり
(地謡)

「ええ、プラスチックの袋ですよ。」 ウエイトレスは目をぱちくりとさせながら、おばあちゃんを見つめる。「お願いします」と懇願する。ウエイトレスはマネージャーに袋の有無を尋ねる。おばあちゃんは、袋を受け取ると、説明を始める。「じつは、かごの中の同じ袋に二つの植物があって、窮屈なの」二つ目の植物が、テーブルの上にそっと置かれた。もう一つのものより細くて少し弱っている。この植物も、一つ一つの葉が「デイ・ケア」を受け、小さな声で囁きかけられている。言葉は分からないが、私にも浸み込んで、元気づけられる。おばあちゃんは、落ち着きのない視線を隣のテーブル（即ち、私のテーブル）に向ける。私に、何時にレストランから出るのかと聞く。あちらこちらを巡るおばあちゃん達の助けとなることを、また求められるのかとの思いが頭をかすめる。「ええ、じきに」と私は答える。「残念だわ」とおばあちゃんは答える。「スーパーに行って戻る間、植物をみてもらおうと思っていたの。仕方ないわ。自分で持っていかなければならないわね。かわいそうに。あちらこちらを動かされて疲れるでしょうね」こう言って、立ち上がり、勘定を払った。私は、おばあちゃんが何か忘れたのではないか、という気がした。その場所を探したが、何もなかった。おばあちゃんの後を追って少し会話をする口実は何もない。自転車のペダルをこぎ、遠くに灰色の点となったおばあちゃんを見つめる。私のテーブルには、開いて乾いた松の花があった。アイリッシュ・コーヒーに添える飾りだ。

草木は無情であると言われるが

花が咲き実をつける
しかし、その季節を違えることはない
(地謡)

私は目に見えないものを信じるようになる。友成のように。

.....
© クリスティナ・ラスコン・カストロ著「花見」(出版社 UABJO 2006 年 / 出版社 Tierra
Adentro 2009 年)

同著書により 2005 年、ベネメリト・デ・アメリカ短編ラテンアメリカ賞を受賞

.....
© 訳者: Hiromi Yoneda /メキシコ大使館。